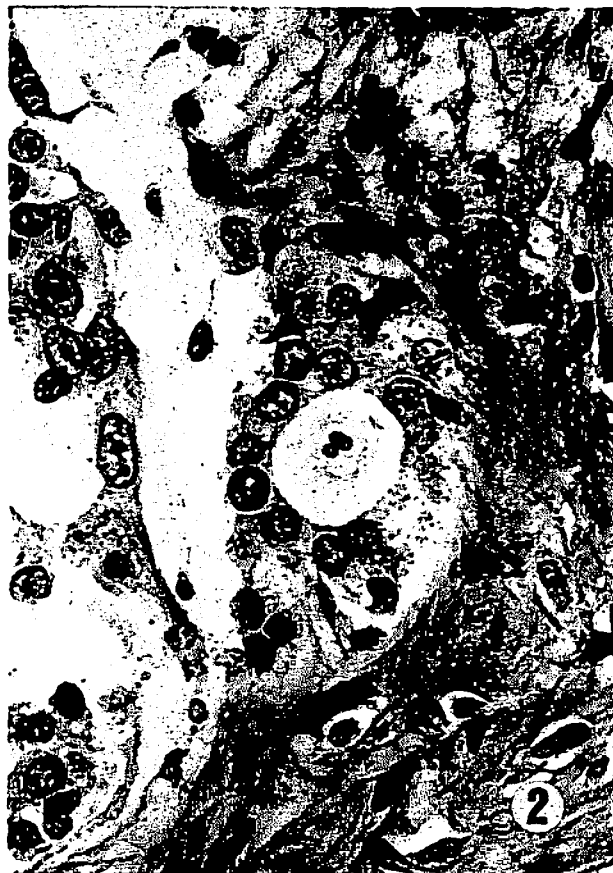
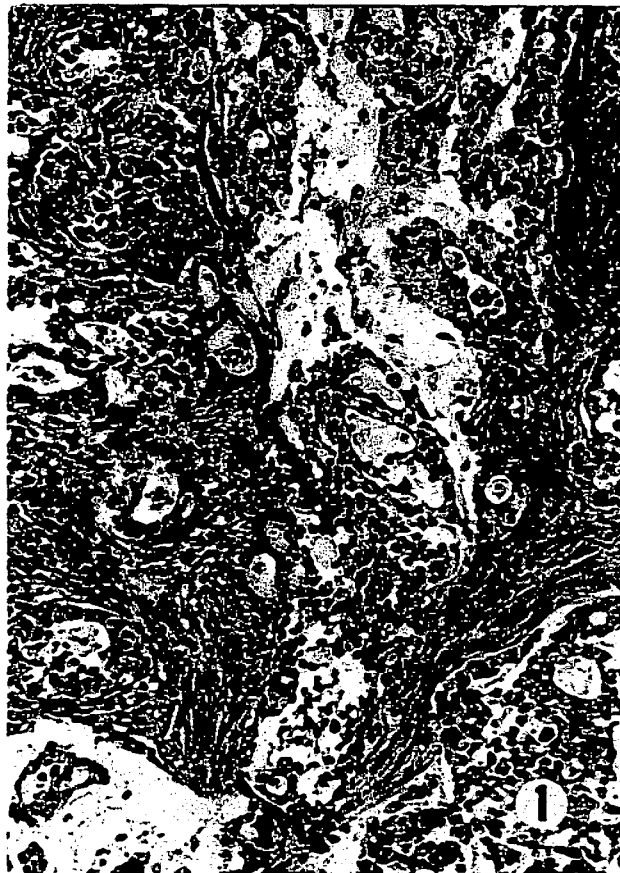


# 犬の脳

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第25回獣医病理学研修会標本No.443



動物：犬，ヨークシャー・テリア，雄，13歳，体重3.6kg。  
臨床：1983年3月25日，患者は前かがみになり，約30分間ブルブル震えていた。あえぎ呼吸も認められた。1984年3月9日，再び高度のあえぎ呼吸が発現した。同年9月29日，血液を混じた下痢便がみられた。その後，鼻汁，痙攣もみられるようになった。X線撮影により腎結石が認められた。さらに，血液・尿検査の結果，腎不全と診断された。腹膜灌流，補液などの治療を試みたが症状は改善されず，同年10月5日，安楽死させた。

剖検所見：腎は，両側とも表面の不整凹凸，軽度の萎縮，1～5mm大の数個の結石が認められた。脳は，実質全域に0.5～3mm大の微小出血巣が多数みられた。また，右側前頭葉底部に3×1.5cm大の乳白色を呈した腫瘤が認められた。この腫瘤の断面は，前部では脳実質との境界が明瞭で遊離性であったが，後部では境界不明瞭となり，隣接する脳実質とともに共通の軟膜でおおわれていた。腫瘤内の出血，壊死は比較的軽度であったが，周囲の脳実質は高度に圧迫され，出血，軟化が認められた。

組織所見：増殖した細胞塊は蜂巢構造を呈しており，間質は豊富な膠原線維の走行がみられた。鍍銀法を施すと，好銀線維が細胞間に密に入り込む像はみられなかった。腫瘤の一部にはいくつかの明瞭な腺様構造がみられ（写

真1，HE，×100），これらの内腔には唾液に消化されないPAS・Alcianblue・Mucicarmine陽性物質を入れていた。この物質は間質にもみられた。増殖細胞の核は類円形～紡錘形で，明瞭な核小体を1個ないし2個有していた（写真2，HE，×400）。有糸核分裂像はところどころにみられた。細胞質は弱好酸性であった。

考察および診断：以上の組織学的特徴より，本例を粘液産生のみられた腺癌とした。本腫瘍の発生母地は，腫瘍が嗅球，嗅索などに限局してみられたことや，今回，検索されなかった鼻部内腔を除き，他に腺癌病変がみられなかったことなどから，鼻部の粘液腺が強く疑われた。

なお，研修会当日，EpendymomaまたはMyxopapillary-ependymomaではないかとの意見が出された。しかし，本例の腫瘍組織は，脳実質との親和性に乏しく豊富な結合織によってとりかまれているなど，Ependymomaのglioma的性格はみられなかった。また，Ependymomaに時としてみられるCilia，PTAH染色陽性のBlephaloplastはまったくみられなかった。一方，Myxopapillary ependymomaは一般に脊髄末端のFilum terminaleにみられるが，本例の腫瘍は組織形態的にも異なるうえ，その部に腫瘍病変が認められず，頭蓋内では嗅球付近に限局されていた。